

認定職業能力開発校
埼玉ファッションアカデミー
校長 濱西 富美子



認定職業能力開発校としての取り組み —アパレル系洋裁科—

1. 認定職業能力開発校埼玉ファッションアカデミーの発足について

私は埼玉県所沢市内で認定職業能力開発校(以下、「認定校」という。)である埼玉ファッションアカデミー(アパレル系洋裁科)を1979(昭和54)年から約40年間続けているものです。

当初は併設している服飾の専門学校浜西ファッションアカデミーの学生が、全国規模のコンクールの婦人服部門で内閣総理大臣賞を受賞しても「資格」を持っていないことを理由に、顧客から適正な工賃をもらうことができず、困っていました。埼玉県の担当部所に相談へ行ったら、労働部の職業訓練課を紹介され、そこで初めて職業訓練校や技能検定があることを知ったのです。当時、埼玉県内に洋裁科の認定校がなかったため、その設立から始めなくてはなりません。埼玉県内及び東京都内の事業主に呼びかけ、埼玉ファッションアカデミー運営会を立ち上げ、認定校を発足させました。

この認定校の発足にあたってお世話になった恩人は『歯車と私』の著者として知られる故成瀬政男先生でした。先生がすぐ近所にお住まいだったため、直接ご指導いただきました。先生の助言により、以前から関心を持っていたドイツのマイスター制度とその訓練方法について認識を深め、日本においてもドイツのような徒弟制度に代わる技能と技術の伝承の学校が必要であると強く感じました。先生は時代が変化しても対応できる基礎のしっかりした職業訓練校を作ることの大切さを説かれ、その基本理念が本校の礎となっています。

2. ドイツの職業訓練の研究

1) 視察

成瀬先生の進言から、まずはドイツのマイスター制度の視察から始めることにしました。まったく伝手のない中、ドイツの商工組合にアパレル系洋裁関係視察希望の手紙を書きました。すると日本国からの依頼状と視察者が公的に認められた者、という条件付きで承諾の返事がもらえたのです。当時の労働省の局長が早速、たった1人の調査員のために動いてくださり、ドイツ国内19か所の関連施設とアポイントを取っていただきました。こうして約1か月に渡る調査が実現したのです。その結果、貴重な体験とたくさんの資料を持ち帰ることができました。そして、1979(昭和54)年、日本にドイツのマイスター養成訓練のような職業訓練校をスタートさせることができたのです。

また、私のドイツでの単独視察の中で見学したいくつもの職業訓練施設や学校、工場などで特に印象深かったのはベルリン(当時西ベルリン)にあったベルリン芸術大学のファッションデザイン科とミュンヘンにある婦人服のパターン(製図)のマイスター養成校のミュラーウントゾーンでした。その訓練内容とカリキュラムに魅了され、当時高校生であった長女をドイツへ留学させるべく準備を始めました。

当時(昭和56年頃)は学校教育の中での進路指導のあり方や偏差値問題など、大きな節目を迎えていた頃でした。このような世相の中、長女をモデルにした職業準備教育に対する問題提起として、「職業教育と学校教育の融合に関する提言」という論文を

1982（昭和57）年、労働省（当時）主催の職業訓練指導員実践論文コンクールに応募し、労働大臣賞をいただきました。労働省からは「この授賞論文のような人材育成につながるように」と職業訓練校建設に対し補助金を出してくださり、現在につながる訓練施設ができたのです。また、1984（昭和59）年には埼玉ファッションアカデミー運営会が職業訓練法人となりました。

2) 留学

長女の留学の準備として、ドイツ語の授業についていけるだけの語学力の習得、美術系の大学を2年次まで修了などの他、併設している注文服のクチュールハマニシで働きながら埼玉ファッションアカデミーの訓練生の仲間に入り、技能照査の試験の後、技能士補を取得、さらに国家資格である婦人子供服製造技能士2級を取得させました。こうして3年間の留学をし、その職業訓練の実際を経験させました。視察だけでは得られない多くの貴重な体験をした後帰国し、現在は職業訓練指導員として認定校である埼玉ファッションアカデミーをサポートされています。

3) 帰国後のカリキュラム及び教材開発

長女が留学する前の本校の指導内容は、基本的に労働省（当時）の定める内容に沿ったものでした。しかし、帰国後、最も本校の職業訓練に影響を与えたのはカリキュラムの見直しと教材開発です。

まず、カリキュラムの見直しですが、全体像をしっかり把握させることを前提に組み立て直しました。このカリキュラムの大きな特徴はプロジェクト（修了制作）とプレゼンテーション（発表）にあります。まとめる力と伝える力を養う内容になっています。1年間の普通職業訓練も3か月の短期委託訓練も基本的にこのカリキュラムに沿って実施しています。

次に教材開発ですが、「婦人服のパターン（製図）」の教材開発においては、本校で使用している独自に開発したパターンがマイスター養成校ミュラーウントゾーンのパターンととてもよく似ていたことが、

教材としてまとめるきっかけになりました。本校のパターンは併設している注文服の工房クチュールハマニシと故埜経亮の工房の顧客約5,000人のデータを基に作られている独自のパターンで、その内容を東京藝術大学美術学部芸術学科人体美学研究室の美術解剖学で知られる故西田正秋教授のご指導のもとでまとめたものがベースになっています。ミュラーウントゾーンでは画家のアルブレヒト・デューラーの人体図から人体を基本にパターンを開発してきたと校長が話してくださいました。日本とドイツは離れていても人体を基にパターンを作るという共通の考え方から両者は生まれたものとなり、力を得る思いです。日本において真の意味のマイスター（熟練技能者）を育てるため、このパターンの教材をまとめようと現在制作中です。その一部を2018（平成30）年度の職業訓練教材コンクールに「婦人服の作り方—パターン—（人体の構造を基本とした衣服設計）基礎編」として応募したところ、厚生労働大臣賞（入選）の受賞を果たしました。今までの努力の一部を認めていただけたようで嬉しく思います。

3. 現状と課題

1) 入校生の年齢変化

現在当校では1年間のアパレル系洋裁科の普通職業訓練（1,450時間）と3ヶ月の短期委託訓練（316～346時間・開催時期による）のユニバーサルファッション科を実施しています。両コース共、高学歴の方が多くなり、年齢層も若年層が激減しています。かつては技能五輪全国大会へ、第28回名古屋大会から第39回福島大会まで、のべ17名もの訓練生が参加し、第35回埼玉大会では選手宣誓もしました。上位入賞を果たした参加者は現在も業界で中堅技能者として活躍しています。

しかし、現在では若い方の応募が少なくなり、大卒や社会人になってから学び直す方が多くなってきています。彼らからは「もっと早くから学びたかった」と後悔する声も少なからず聞かれます。

学校の進路指導において大学等への進路指導だけ

でなく、職業準備教育への進路指導もぜひ組み入れていただきたいと思います。

2) アパレル系洋裁科における教科の見直しと 技能検定の実技試験について

2015（平成27）年に約40年ぶりにアパレル系洋裁科の学科の指導要領の見直しが行われました。その際、調査員として参加の機会を得ました。見直し項目の95%は委員会で同意を得られたものの、5%については時期尚早と見直しは見送られました。その内容とはユニバーサルファッションに関する項目です。

現在、身体に障害を持っている方は全国で4,287,000人（平成28年度厚生労働省社会援護局障害保健福祉部・生活のしづらさ等に関する調査資料）余りおられ、また高齢者の数は6人に1人という高い割合になっています。現在、我々の多くは既製服を着ていますが、障害を持った方や高齢の方には既製服そのままでは着にくかったり、問題が起こったりと様々な配慮が必要になってきます。しかし、その対応はお直し（リフォーム）業者に委ねられ、訓練科目として学ぶ機会がないのです。そこでカリキュラムにユニバーサルファッションに関する項目を追加して欲しいと提案したのですが、却下されました。その理由の1つが「教科書がない」ということでした。そこで本校のユニバーサルファッション科で使用している内容をまとめ、平成28年度職業訓練教材コンクールに「ユニバーサルファッション—配慮の必要な高齢者・身体に障害を持った方の婦人服のパターン（製図）の作り方—」を応募しました。この教材は特別賞（中央職業能力開発協会会長賞）をいただきました。出版の準備を進めていますが、資金の目処が立たず、教科書という形にはなっていません。しかし、近い将来ぜひともユニバーサルファッションの項目として職業訓練の科目に追加していただきたい内容だと思っています。

技能検定の学科試験の見直しがされる一方、実技試験は40年間、ほぼ変わっていません。若い方たちが意欲的に取り組める試験問題に変えていくことも

とても大切であり、今後の課題だと認識しています。

参考までにドイツの実技検定試験内容を紹介したいと思います。ドイツのゲゼレ（中堅技能者）修了試験（日本の技能検定2級相当）は日本とは比較にならないほど綿密に企画されており、将来、婦人服作りの技能者として独立できるための基礎が習得できているかを試験する、しっかりとした内容になっています。試験内容の概略は以下の通りです。

（実技試験日程3日間）

＜1日目＞

- ・事前に登録されたモデルの採寸
- ・試験課題のデザインのパターン制作
- ・布地の裁断　・仮縫いの組み立て

＜2日目＞

- ・試着と補正（モデルに対し）　・本縫い

＜3日目＞

- ・本縫い　・まとめ作業　・仕上げ
- ・モデル試着　・採点

この内容は実際の制作に即し、実践的でとても理にかなっていると思います。将来、日本でもこのような試験形態で実技試験が実施されたら素晴らしい技能者が生まれると思います。

4. おわりに

民間の認定校として試行錯誤を繰り返しながらここまで来られたのは、支援し、助けてくださっている方々のお陰と、深く感謝しています。

『歯車と私』の著者、故成瀬政男先生のことは著書を拝見するまで現在の職業能力開発総合大学の初代校長とは知らずにご指導いただいていた。

先生は「職業訓練とは、どの分野においても科学を技能と技術で結びつけ、人々を幸せにすることを学び訓練する場所だ」と話されていました。「婦人服の作り方を教える職業訓練校もぜひ設立して、皆に喜ばれるような服を作る人材を養成して欲しい」と自信のなかった私たちを励まし、背中を押してく

ございました。

私たちが洋服を着始めた歴史はまだ浅く、一般に洋装が主流になったのは第二次世界大戦後（1945年以降）ですし、明治から数えたとしても140年しかたっていません。その浅い歴史の中でも、各研究機関や企業など服作りの研究が着実に進められています。そして、その製造も注文服や個人の家庭で作るといったものから、買うという既製服の時代へと変化してきました。現在、既製服は全体の95%以上を占め、その生産拠点は一部を除き、国外（東南アジアなど）へ移り、アパレル業界は厳しい立場に立た

されています。しかし、どんなに既製服が普及しても注文服は残ると思っています。それは既製服では対応しきれないユニバーサルファッションや既製服では満足できない顧客層、冠婚葬祭やステージの衣裳、個性派の方々、さらに体型的に既製服ではサイズ対応が難しい方などのニーズがあるからです。中でもユニバーサルファッションの需要は増えているのに職業訓練の教科に該当科目は入っていません。ぜひ、職業訓練の中で取り上げ、専門の技能士を育成できる方向に進むよう願っています。

はまにし ふみこ

略歴

昭和30年（1955年） 女子美術大学卒業
女子美術大学短期大学部服飾科 高田力之研究室 勤務
昭和35年～50年（1960年～1975年）
16年間に渡り田中千代学園、近藤れん子研究所等、12の洋裁関係の学校で学ぶ
昭和36年～54年（1961年～1979年）
現代の名工（洋裁）塙経亮氏に師事
昭和39年（1964年） 東京藝術大学美術学部芸術学科 人体美学西田正秋研究室 研究員
昭和40年（1965年） クチュールハマニシ 代表
昭和51年（1976年） 専門学校 浜西ファッションアカデミー 校長
昭和54年（1979年） 認定職業能力開発校 埼玉ファッションアカデミー 校長
埼玉ファッション事業協会 会長
昭和59年（1984年） 職業訓練法人 埼玉ファッションアカデミー運営会 会長
昭和62年（1987年） 埼玉県職業能力開発協会 理事

職業訓練指導員（アパレル系洋裁科）、1級技能士（婦人子供服製造）